郷土ちがさき

圓藏馬鹿おどり　圓藏祭囃子保存会
第 50 回　茅ヶ崎市郷土芸能大会にて

第 156 号
発　行　令和5年1月1日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会　長　平野文明
編集責任　平野文明

小山敬三画伯の未公開作品紹介　名取龍彦　……2
ドラマ「鎌倉殿の十三人」視聴感想文の大公開　……7
風（自由投稿欄）・人とのご縁に恵まれて（前田照勝）
・郷愁（川村美子）・演劇＆映画の始まり（長谷川由美）　…13
郷土会からのページ（西　輝幸さん追悼・玉縄城址探訪
報告・今後の事業予定・事業報告二件）他　……20

今、私が一番望んでいることは完全自動運転の自動車です。

年齢を重ねるとだんだんものを見るのがつらくなり、夜間の運転はもとより、夕方でさえ苦労します。そこで「早く出来ればいいなぁ～」と思っています。

まだ行ったことのない名所旧跡をめぐりたい訳ではありません。うちのカミさんのお使いで、近くのスーパーから、大根、ニンジン、肉、魚、たまに少しのお酒など買って来ればいいのです。

遠出といえば、子供たちが小学生のころ、夏休みの二年分を使い、芭蕉の「奥の細道」を車で回ったことがありました。学校に出す自由研究のための家族旅行でした。当方の車にはエアコンがなく、窓を閉めて隣を走る車を見ながらの運転でした。あのような旅行なら挑戦してみたい気がします。芭蕉の旅路の所々には大きな句碑が建っています。その陰から、我が家の豚児たちが、小学生の姿のままで、ひょいとのぞくような気がするのです。

過ぎ去った日のことが無性になつかしいです。

年が改まった今年もいろいろの出来事が起こることでしょう。数年後、それが皆様方にはなつかしく思い出されるような良い年でありますように。

（茅ヶ崎郷土会　平野文明）

小山敬三画伯の作品　無題　1938 年　油彩画　茅ヶ崎個人蔵

小山敬三画伯の未公開作品紹介

名取龍彦

はじめに

新年号に合わせて、小山敬三画伯の未公開作品をこの誌上で皆さまにご覧いただきます。

タイトルでは未公開としましたが、正確には、茅ヶ崎純水館研究会が主催した昨年八月二十一日の「純水館・房全・敬三・藤村」学び講座で公開・展示しています。

所蔵者は、小山敬三画伯のアトリエ兼自宅の管理に携わっていた方のご子息です。所蔵者のお名前（苗字）に「牛」の漢字が入っていますので、敬三画伯が「牛の絵をあげます」と言ってプレゼントした作品です。

前述の「純水館・房全・敬三・藤村」学び講座では、茅ヶ崎市美術館の月本寿彦学芸員がこの絵の解説をしました。

奇をてらうことのない正攻法、まともに、ひた押しに制作を進める（小山敬三画伯の）片鱗をこの作品にも見ることができます。背景の樹木の関係から国内ではなくフランスの風景と思われます。若干の薄い汚れがありますが、もともとの絵の具の美しさ、絵の具の上質さが伝わってきます。古い作品ではありますが、コンディションはとてもよいです。筆の流れのよどみのなさも小さい作品ながら充分に感じることができます。

小山敬三作品の特徴のひとつは、現在でも色あせることない保存状態（コンディション）の良さです。その理由は、画伯の「遅筆」と高価な絵の具の使用です。「遅筆」により、時間をかけてゆっくりと絵の具を重ねることで保存状態が良くなります。高価な絵の具の使用は、画伯の生い立ちに関係しています。

小山敬三の生い立ち

小山敬三は、生涯、生活のために絵を画くことがありませんでした。画家を志した当初から経済的に困窮することがなかったからです。敬三は長野県小諸で、小山久左衛門の三男として明治三十（一八九七）年に生まれます。小山家は江戸時代初期の延宝二（一六七四）年から続く豪商で、醸造業、小売業、金融業や山林事業等で財を築いてきました。久左衛門は、明治二十三（一八九〇）年に製糸工場の純水館を起業しています。

敬三が父の久左衛門へ画家をめざすことを相談する場面です。時は、大正五（一九一六）年、敬三、一九歳です（大正六年、二〇歳とも）。場所は、後に敬三がアトリエ兼自宅とした南湖の小山別荘です。「私（敬三）はここで父と三日三晩、将来について議論した」と『来し方の記』に書かれています。父子の議論をまとめます。（注１）

父「絵を画くのは高尚な趣味だからやるが良い。しかし、これも米塩にかえる、つまり絵によって生活しようというような事を

考えてはいけない」

「それは絵をもって生活しようとすると、とかく富豪だとか、権威者に諂（へつら）うような立場になりがちで、絵が堕落するか、人物が堕落するか、そうした立場におちいりやすい。自分の子をタイコモチ（幇間）にはしたくないんだ」

子「私はどうも生活に対しての可能性について自信がない。例え才能があったとしても、その時代に認められなければ非常に困難な立場におちるし、才能がなければ尚更のことだ。この問題は、自分が神様ではないから予めわからない。私の生活に対しての心配で、画家になることを許してくれないなら、私の生活を一生めんどうみてくれませんか」

「絵は自分の一生の仕事と思う。一生懸命誠をこめて描きます。それだけは誓うことができます。しかし、世に名をなすとか、生活できるとかということは全然自信がありません。たとえ世に認められず、みじめな生活をすることがあっても、絵を画いて安心立命、墓に入ります」

父「ああ、そういう考えになってみるならやってみるもよかろう」

父が画家をめざす敬三の経済的な面倒をみることになり、敬三の画家としての人生が南湖からスタートします。

敬三は大正九（一九二〇）年、二三歳でフランスへ留学します。ヨーロッパで第一次世界大戦が終わるのを待っての渡仏です。超豪華客船『熱田丸』でフランスへ向かいます。

その船中で日本ゴルフ界の草分けである西村貫一氏と出会います。後、西村氏が中心となって昭和四（一九二九）年に関西の政財界の大物たちが「小山敬三作品保有会」を作ります。敬三作品は、「保有会」参加者一二名（後に一四名）が購入します。敬三は、経済的な心配をすることなく絵を画くことができるようになりました。昭和十二（一九三七）年には「小山敬三作品保有会」の勧めで、「保有会」の作品を画くために再び渡仏します。

今回紹介した未公開作品は、一九三八年制作ですから、この渡仏の際にフランスで画いた作品だと考えます。

この後も敬三は、政財界の人々との交流を深めます。日本や世界が数々の戦争を繰り返した時代でも、高価な絵の具を購入することができました。

敬三画伯の動物を描いた絵

筆者は敬三画伯が画いた動物の絵をほとんど見たことがなかったので、敬三画伯のご令孫の中嶋慶八郎氏に、画伯と動物画についてお聞きしました。中嶋氏からの返信メールです。

お問い合わせの小山敬三の動物の絵についてですが、確かに少ないようです。美術館にある絵では《松籟》（一九三九年油彩）という作品がマリー・ルイーズ夫人と飼犬が茅ヶ崎の家の庭でくつろぐ様子を描いた物です。添付しますので、講演でお使いいただいて結構です。とても穏やかな雰囲気ですが、この年、ナチスがポーランドに侵攻し、第二次大戦が始まりました。その後日本の参戦により、小山敬三夫妻は茅ヶ崎から小諸に疎開します。また、小山敬三がフランスから帰って日本のモチーフを探して旅行をしている時（一九三〇年代）だと思われますが、動物園で描いたと思われる動物のスケッチがたくさんあります。これらが展覧会に出すような油絵の作品になったという記録はありません。ご参考までにその一

例をお送りします。
中嶋氏から送っていただいた画像です。

冒頭の絵の他に牛を描いた二作品がありました。『牛』（画伯一六歳の水彩画）と『小牛ら遊ぶ大島

動物のスケッチ　小諸市立小山敬三美術館所蔵

「松籟」　小諸市立小山敬三美術館所蔵

の海岸』（画伯二二歳の油彩画）です。（注２）

おわりに

筆者の研究テーマは埋もれてしまった歴史の掘り起こしです。歴史に埋もれてしまった「純水館文化」を発掘するなかで、昨年五月に冒頭の絵の所蔵者と出会いました。

ご存じの通り、小山敬三画伯は文化勲章受章者で、茅ヶ崎名誉市民です。敬三画伯とその作品は「茅ヶ崎の宝物」です。拙稿を紙面で読んでいらっしゃる方は、是非茅ヶ崎郷土会のホームページを開いてください。本誌（「郷土ちがさき」一五六号）のカラー版が掲載されていて、カラーの敬三画伯の作品を見ることができます。「茅ヶ崎郷土会」で検索するか、ホームページへ二次元コードから入る場合は次のコードです。

絵画を刊行物で公開するには、所蔵権所有者と著作権所有者の両者の許可が必要です。所蔵者と中嶋慶八郎氏の許可をいただいて、この紙面で公開しています。

今年は、中嶋慶八郎氏の講演会を七月二十三日（日）に茅ヶ崎公園体験学習センター（うみかぜテラス）で開催します。中嶋氏に長野県から茅ヶ崎へお越しいただく予定です。

拙稿をお読みなった皆さまは、新しく掛け替えられた二〇二三年のカレンダーや予定表の「七月二十三日」に、「中嶋氏講演」とご記入しておいて、是非ご来場ください。

なお「茅ヶ崎の海　よもやま話」は、今回お休みです。

注１『気韻生動の画家　小山敬三の世界』小諸市立小山敬三美術館　二〇二二年　一八～二〇頁

注２　前掲書　一九頁・二八頁

〈参考文献〉

『気韻生動の画家　小山敬三の世界』小諸市立小山敬三美術館　二〇二二年
『小山敬三展』長野県信濃美術館　一九九六年
『シルクの里小諸　純水館ものがたり』櫟　二〇〇七年

大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」　視聴感想文の大公開

鎌倉を舞台にした大河ドラマの放映、なかなか無いことだし、茅ヶ崎からも近い所だし、多くの人が見ているだろうなと思いました。そこで、「感想をお寄せください。長くてもいいですよ、一言でもいいですよ。」とあちこちでお願いしたところ、七名の方が応じてくださいました。原稿の到着順に紹介します。次のとおりです。

原稿料は出ませんが、お寄せいただいた皆様にお礼を申し上げます。　（本誌の編集子）

孫娘と見た「鎌倉殿の十三人」

ちがさき丸ごとふるさと発見博物館の会（略称　丸ごとの会）

神谷文子

保土ヶ谷区在住の大学一年の孫娘との事をお伝え致します。

その孫娘が申しますには、

大河ドラマを見た事が無かったけれど、父親が見ていたので一緒に見はじめて、テンポが速くて、一話ごとにテーマが解りやすい

と見続けているそうです。

七月の、昼過ぎには雨が上がった日でした。昼食を食べに、一人で我が家に現れた孫娘が、近所の史跡などをめぐりたいと申します。

「よし！　任せといて。」しかし、また降り始めるかも知れないので一緒に自転車で出発しました。

矢畑の本社宮、浜之郷の鶴嶺神社、同じく弁慶塚、南湖の御霊神社、それに下町屋の旧相模川橋脚跡などを回りました。

旧相模川橋脚跡ではそのリアルさと静けさに驚き（国道脇とは思えないと言っていました）、弁慶塚では、個人宅に有って大事に守られいる様子に感激。しかし御霊神社で雨が降り出して慌てて帰宅。

「私っち　平家だから雨か」。

「改めて旧跡に驚いた」と言っておりました。

大河ドラマのおかげで、茅ヶ崎を再認識してもらう良い機会になり、地元の祖母は嬉しかったです。

私の父の祖先は、京から来て富士川の合戦に参加し、落ちて富士川近くに住み着いた平家方なのです。屋敷でまつるお社（やしろ）には、富士川から引き揚げられたといわれる文殊菩薩像が有ったそうです。今は小さな社だけが残されています。

御賽銭箱は、私の誕生の時に父が奉納してくれたもので、孫たちと訪ねた事がありました。

梓澤 要著『荒仏師　運慶』を大分前に読んだ時、鎌倉・伊豆の仏像と武将の人物像に興味が湧きました。読み返しながらこのドラマを見ています。

静岡市在住の弟・妹と、梶原景時の最期の決戦の事柄などをラ

イン交換などして、見聞きした事を報告し合い盛り上がりました。やっぱりドラマを楽しんで見ています。

余談ですが、今回の台風一五号の、静岡市清水区の浸水、断水の被害地は梶原山などに比較的近いようです。遠くからですが、お見舞いを申し上げます。（十月一日、編集子受信）

大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」の感想

思いつくままに書いてみます

（丸ごとの会）　**平松和弘**

円蔵中学での郷土学習「中学校付近の歴史を尋ねる」でも話しましたが、懐島景義は源頼朝旗揚げの時に、弟の大庭景親と対立してまでも源頼朝に付き従って、鎌倉幕府を開く際にも作事奉行として鶴岡八幡宮や大蔵幕府の建物を建てる指示を重点的に行っています。懐島景義の屋敷があった周辺には現在でも大工が多いとの事です。

また、源頼朝が京の天皇家に赴く際には、景義の館に逗留してから、京へ赴きました。

稲毛三郎重成が妻（妻政子の妹）の供養のために架橋した旧相模川橋脚への式典参加の際にも、頼朝は懐島景義の館に逗留しています。このこと、斎藤昌三筆「郷土の体系―茅ヶ崎文華一面―」（昭和四十八年茅ヶ崎郷土会編集　茅ヶ崎教育委員会刊『郷土茅ヶ崎』上巻一〇九頁）に「建久九年（一一九八）十二月、頼朝が義弟の稲毛三郎が架橋した相模橋の供養に参加したのも事実であるし、この時もおそらく一週間を懐島家に泊まったものと考えられる」とあります。

ところが、これほどにも源頼朝に信頼されていた懐島景義の紹介が、残念ながら、今回のテレビのドラマにはありません。ないのは、作者が三谷幸喜だから仕方ないかもしれませんが、手落ちと言っても仕方ないのではないか！　と思います。

また、寒川の梶原景時だけでなく、鎌倉幕府に関連して、平塚にも土屋氏や岡崎氏、豊田氏、伊勢原や厚木、藤沢にも関連する武士団が多くいたことを考えると、もっと深く掘り下げるべきではなかったかとも思います。ドラマの中にて、北条一族の間の愛憎や、身内の策略による陰湿な話の筋は、小説家が膨らませることができますから、それについて、どうこう言うつもりはありませんが、鎌倉時代というのはこんなにも殺伐としていたのかと、恐ろしい時代だったのかと思いました。

もう少し、地元周辺の歴史を取り込み掘り下げて頂けていたら、神奈川県内も、首都圏全体にも盛り上がって良かったのにと思いました。今回のような展開は残念に思います。（十月二日受信）

「鎌倉殿の十三人」　感想

（丸ごとの会）　**廣田秀行**

ＮＨＫ「鎌倉殿の十三人」。賛否両論有りますが、突き詰めて考えるとこれは「テレビの娯楽ドラマ」です。

その時代に忠実に歴史を追った番組にするには、放送時間、番組構成上に無理があると思います。あまり難しく再現すれば特に

若い視聴者は敬遠すると思います。歴史番組ではないので、視聴者は肩肘張らずに見る番組ではないでしょうか。サラッとストレス溜めずに見ればいいと思います。いやなら見なければいいと思います。

以上、私個人の感想です。

（十月三日受信）

鎌倉殿の十三人を見て

（茅ヶ崎郷土会）**熊澤克躬**

戦の多かった鎌倉時代から戦国時代・安土桃山時代が大好きで、今年の大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」も楽しみに見ている一人です。

鎌倉殿の十三人は、建久十年（一一九九年）一月の頼朝の死後、二代将軍頼家を補佐するため発足した有力御家人十三人（武官九人、文官四人）による集団指導体制ですが、梶原景時一族の滅亡（正治二年―一二〇〇―一月）を皮切りに、三浦義澄、安達盛長と相次いで病死したことで、二年も持たず解体しています。その後は、有力御家人によるすさまじい権力闘争が幕を開けましたが、梶原景時の変、比企能員の変（建仁三年―一二〇三）、畠山重忠の乱（元久二年―一二〇五）を経て、最後に勝ち残ったのは北条時政・義時父子でした。

三谷幸喜脚本によるドラマ前半では、時政は好好爺に、義時は幕府に忠実なお茶の間受けする人物に描かれていましたが、実体は、両者とも野心に満ちた権謀術策の武将であったと思います。ただ二人だけが特別ではなく、当時の有力武将は誰もが権力を握る機会を狙っていたと言えます。特に義時は、父時政を追放し（牧氏事件）幕府の実権を握るとともに、建暦三年（一二一三）には、幕府創設以来の重鎮である和田義盛を滅ぼし（和田合戦）、義盛に代わって侍所別当となり、政所別当と兼務する幕府最高の権力者となりました。そして、承久三年（一二二一）の承久の乱では、尼将軍とも呼ばれた姉政子の力添えもあり、総勢一九万とも言われる大軍で京を制圧するとともに、乱の首謀者である後鳥羽上皇を含む三人の上皇を配流させ、江戸時代まで続く武家政権の礎を築いたと言われています。

さて、ここで今回の大河ドラマで最も好感を持たれた武将は誰かと言えば、多くの方（私もその一人です）が畠山重忠をあげるのではないかと思います。鎌倉殿の十三人には入っていませんが、坂東武者の鑑と称された有力御家人で、今でも深谷市民、埼玉県民が誇る偉人の一人になっています。畠山氏は、武蔵国の大きな武士団であった秩父氏一族の嫡流として代々強大な勢力を誇っていましたが、中でも重忠は知・仁・勇を備えた清廉潔白な武将として、その潔さ誠実さは、まさに坂東武者の誉であったと伝えられています。

余談になりますが、私は十数年前宮崎県高千穂の高千穂神社を訪れる機会があり、国重要文化財の鉄製狛犬一対（全国に三か所しかないと言われています）を拝見したのですが、その時驚いたのは、当神社に畠山重忠手植えの秩父杉があったことです。高千穂神社には文治四年（一一八八）四月、頼朝の名代して参拝したと伝えられており、鉄製の狛犬も重忠が代参、奉納したものと言われています。私としては、一人旅で訪れた九州の高千穂神社に、同じ関東の重忠が参拝していたことに、その時、強く感動したことを今

でも鮮明に覚えています。

（十月二十七日受信）

大河ドラマ　鎌倉殿の十三人

（茅ヶ崎郷土会）**山本俊雄**

TVドラマ「鎌倉殿の十三人」について平野さんから感想をと頼まれた時、好きな時代の事なのと、ドラマも直前まで見ていたのでその気になったのですが、だんだん見るのがつらくなり、見るのをやめたばかりでした。畠山重忠の乱（？）の前です。

「鎌倉殿」は頼朝のことと勘違いをしていました。頼朝が十三人をどの様に活用したのかとか、メンバーが少し違うのではと思ったのですが、頼家の方の「鎌倉殿」だったのでした。頼家を補佐する合議衆のことだったのですね。

主役が北条義時なので嫌な感じがしていたのですが、だんだんと思う通りのいやな運びになりました。始めの頃(頼朝の挙兵時)の義時と兄の宗時の会話に、関東武士、特に北条氏による武家政権を作るという大義名分がありましたが、後の北条一族を考えたこじつけかと思いました。布石と見れば、陰謀一家の下剋上を予告したのではと考えられます。

史上で比企の乱を始め、何々の乱と言われるのは全て時政や義時が仕掛けたもので、梶原景時の失脚・討滅を「北条の乱その一」、比企氏謀殺を「その二」、畠山重忠謀殺を「その三」…と言っても良いのではと思います。

承久の乱に三浦一族から、それも三浦宗家の義村の弟が朝廷側で戦っています。三浦胤義です。阿野全成の子の乳母夫だったということですが北条義時にその子が殺されたこと、後鳥羽上皇の追討令も鎌倉幕府に対してではなく実朝を殺したと思われる義時に対してだった、と書かれた本がありましたがどの本だったか探してみたのですが見つかりません。三浦胤義については、ネットで調べてみますと二代将軍頼家の側室を、頼家が殺害された後に妻にし、その妻は頼家と頼家との子も北条時政、義時父子に殺されたので、妻の嘆きと恨みを晴らさんとして義時に敵対したとあります。阿野全成か頼家との子が原因かよく分かりませんが北条氏に殺された恨みがもとであったと思われます。

義時は頼朝ゆかりの源家一族を次々と殺しています。さらに同僚の有力御家人も謀略にかけて滅ぼしています。それも武家政権を作ることを北条氏が主導するためのやむを得ない処置、こじつけでしょう。

最近の欧州や東アジアの出来事、独裁者による人殺しや人騒がせな国があることに比べて、北条氏も規模は小さくても競合者を殺してきた、そのはしりのような行動です。とてもドラマの主人公に出来るような人物とは思えません。出来るとすれば謀略や競合者の殺し方のサンプルドラマではないかと思うぐらいです。

少し北条氏を弁護しますと、時政以来、代々政治的に優秀な人物が多く、それ故鎌倉幕府が一五〇年も続いた、と思っていました。しかし、少し調べますと、代々の執権のそばには実際に政権を動かした有能な人材がいたことが分かります。それを活かしたのも北条氏の力であったのか、はたまたさらなる下剋上だったのか、とも思います。正に下剋上のはしりで、下剋上は室町時代からではなく鎌倉時代の北条氏からではないかと思います。

（十一月一日受信）

私の感想

（丸ごとの会）**宮本武二**

私は、大河ドラマが好きで、これだけはという感じでTVを観ております。しかし今年の大河は、一言で言って「あまり観たいとは思いません」。

歴史を一年間通して考え直すというか、「そうだったのか」と脚色された内容を以前考えていたことと比較するのを楽しんでいます。今回の脚本家は、少し柔らかい内容のストーリーを書く御仁だと思っていましたので期待外れでした。殺伐とした裏切りや騙し討ちなどの斬り合いが多く、ドラマ終了後も後味が悪いですね。女性上位と思われる描き方も、観ていて「黙れ」という感じですね。

緊張しないで寛いで楽しめる登場人物や筋書きをお願いしたいものです。

以上が「今年の大河ドラマ」に関する私の感想です。

（十一月十二日受信）

大河ドラマ「鎌倉殿の十三人」を観て

（茅ヶ崎郷土会）**源　邦章**

今年の大河ドラマは「鎌倉殿の十三人」ということで、しかも異色の脚本家三谷幸喜さんが脚本を書いているので、大変期待して観ていました。期待に違わず内容の濃い面白いものでした。特に、未だ総てが終了した時期ではありませんが、後半部分に北条義時が位を得て変貌していく様子は、非常に興味深く観ていました。十二月十一日現在、「和田の乱」が終わり、源実朝が暗殺され、いよいよクライマックスの「承久の乱」へと続いて行く所でした。

今回のドラマの前半部分は源頼朝が主役で平氏打倒を図り、後半は北条義時が鎌倉幕府内で実権を握る過程を描いていますが、その全編で歴史に対する様々な疑問が残りました。

その最大の疑問は、頼朝が旗上げをしてすぐ「石橋山の戦い」に敗れ、そのあと安房に逃れましたが、直ちに再起して上総・下総から始まり武蔵を抜け鎌倉に到着しました。この間「石橋山の敗戦」が治承四（一一八〇）年八月二十三日、そして鎌倉入りが同年十月六日と一か月半で上総・下総は上総氏・千葉氏を、武蔵は川越氏・畠山氏等の有力武士団を配下に収めての鎌倉入りでした。私ども郷土会では平成二十八年度に「相模のもののふたち（頼朝の御家人たち）」というテーマで、相模国の有力御家人（三浦氏・和田氏・土肥氏・岡崎氏・土屋氏・梶原氏そして大庭氏）の館跡とその周辺地の文化財めぐりを開催しました。今にして思えば懐かしい行事でした。当然、相模国は頼朝が流されていた伊豆国の隣接地であり、父親の源義朝が居を構えていた鎌倉のある場所なので、大庭景親などの一部を除いて親頼朝派の武士が多い所でした。なぜ伊豆国や相模国に限らず上総・下総・武蔵も頼朝を担ぎ上げて京都朝廷イコール平氏政権に反乱を起こしたのかが私にとって最大の疑問でした。

源頼朝が旗上げして平氏政権に反乱の「のろし」を挙げた理由は、

①「平治の乱」で父、義朝は破れたので、頼朝にとって平清盛は親・兄弟の仇であること。

②以仁王の令旨を受け取り、平氏政権に対する反抗の正統性が担保されていた。

③以仁王の決起・敗戦により、以仁王の令旨を受け取った全国の源氏に対し平氏から追討の命令が出て、頼朝は身の危険にさらされていた。

これに対して東国武士団が旗上げ参加した理由は以下の通りと思われます。

①東国武士団の多くは坂東平氏と言われるくらいに桓武平氏の末裔ですが、（因みに北条氏・上総氏・千葉氏・三浦氏・和田氏・川越氏・畠山氏等は総て坂東平氏）平清盛一族だけが出世して、他の平氏は虐げられており、同族だからこそ反発も強かった。

②何よりも武士は土地を守ることに執着し、それだから土地保有権を保障してくれる政治機構を欲していた(所領安堵)。

③その例が富士川の一戦で、源氏が大勝した際、頼朝は一気に京都へ攻め上ろうとした。しかし武士団の古老たちは「未だ東国には反源氏の勢力が各所にいる。東国を安定させてから京都へ攻め上るべきだ」と主張したので、頼朝も京都侵攻を諦めた。ここにも東国武士団が土地を守ることが第一という気概が窺える。

以上のようにして頼朝の旗上げ理由と東国武士団の思惑が当初は一致して挙兵しましたが、決して一枚岩ではありませんでした。頼朝の死後、頼家・実朝は将軍としての器ではないと判断されると、容赦なく切り捨てられました。頼朝亡き後、北条氏は御家人同士の闘いに勝ち上がりました。武家の権益を守ろうとする武士団は、後鳥羽上皇が北条義時追討の宣旨を出したとき、これに迎合することは東国武士団が再び朝廷に使役される「番犬」に成り下がることだと思い、一致団結して京都に攻め上り朝廷方を粉砕しました。この結果、武士の政権が確立し明治維新まで続くことになりました。

（十二月十三日受信）

会員募集

茅ヶ崎やその近隣の歴史・史跡・文化財などを愛好する集まりです。

歴史を調べる、書き残す、伝える、楽しむ、そして仲間づくり

- 市内、市外の史跡文化財めぐり
- 歴史や民俗学の勉強会
- 大岡越前祭に「大岡越前守遺跡写真展」
- 市民文化祭に写真展。
- 年間3回、会報『郷土ちがさき』を発行
- 年会費　1,500円
- 設立は昭和28(1953)年4月
  会員は現在約80名。

あなたも入会して一緒に活動しませんか！

申込先

〒253－0008　茅ヶ崎市芹沢2132－2
平野文明
TEL 0467-53-2453　携帯 090-8173-8845

加入の希望を会員の誰かに伝えても結構です。

風　自由投稿欄

人とのご縁に恵まれて

前田照勝

ネット社会は怖い。高齢者の誰もがそんな危機意識を持っているのではないだろうか。自分もその一人である。未だにスマホ決済などというものは利用したことがない。一方では生活が格段に便利になった。調べものなどは瞬時に答えが出るし、新しい料理も動画によって教えてもらえる。ネットで知り合った男女が幸せな家庭生活を送っていることも知っている。

恐れてばかりでは前には進めない。一歩踏み出してみれば意外な展開が待っているものである。歩みは遅くてもいい。自分のやれることを少しずつ広げて、ボチボチとこのネット社会を生きていこうと思っている。

まだ現役のころの話である。ずい分昔のことだ。中学の同窓生のご主人のお誘いでブログ仲間の「オフ会」なる会に参加した。そこに至るまでには経緯がある。

当時、中学の同窓生の数名と年賀はがきの交換が続いていた。その内の一人、日置(ひおき)養子ちゃんに、自分が始めたブログのアドレスを年賀はがきに記入した。パソコンに不慣れだったので、アドレスを間違えてしまった。日置さんのご主人はその間違いを発見してくれてメールのやりとりが始まった。とても親切な方で、ブログに写真を張り付ける方法や、人との交流方法などを懇切丁寧に教えてくれた。五歳年上だったので、自分にとってはいい兄貴分の存在となった。

オフ会は隔月の開催だったろうか。オフ会のリーダーは劉備玄徳の「劉備(りゅうび)さん」。モテモテのかっこいい男性である。謎めいた女性の参加者の名前は忘れた。ワクワクするような妖艶な女性だった。ともあれ、個性豊かなメンバーが毎回十名以上は集まった。異年齢・異業種の会である。集まる店は、横浜中華街や、都内の居酒屋だったりした。

兄貴分の日置さんは通称「トシさん」。自分は以前飼っていたラブラドルレトリバー犬の名「ヨハン」を名乗った。トシさんは西多摩の瑞穂町が住まいなので、オフ会の度に最終電車に間に合うようにと早めに帰った。

オフ会の番外編もあった。関西方面の女性グループ三人が河口湖に来るというので、トシさんと私とで会いに行った。その三人とは日々のブログの文面で確認し合っていたので、お互いに人柄

が分かっている。心和むような出会いであった。まるで同窓会のような雰囲気だった。暫くして三人の内の一人が癌になってしまって「千羽鶴を折って欲しい」との要請があった。慣れない手つきで要請された数の折り鶴を作って送ったというエピソードもある。日常生活では考えられない体験をした。

思い出をいっぱい作ってくれたトシさんが急死してしまった。七十歳の若さだった。風邪をこじらせて数日後に還らぬ人になってしまったのだ。オフ会のいつものメンバー一〇人ほどが通夜の席に参列した。参列者は三〇〇人以上という盛大な葬儀であった。地元に貢献した人物であることを証明しているように感じた。早いもので、あれから十五年の歳月が流れた。

ネット上のブログというのは、個人の何気ない普段の生活を公開し合うネットワークである。もちろん、公開してもいい内容に限定されるであろう。しかし、自分の一部を公開することによって世界が変わっていくのである。他者の目を意識することで、より客観的に自分を見つめることが出来るような気がする。

交流相手とは喜怒哀楽を共有する。互いの存在を認め合い、励まし合う……。中にはそんな信頼関係になるから不思議である。

人数の多さではない。少数でもいい。自分の行動や思いを知ってくれる人がいる。それだけで明日へのエネルギーが得られるというものだ。

ブログ仲間といえば、生涯の友ともいえる女性とのご縁がある。「さちよさん」である。

さちよさんは栃木県矢板市の“ポツンと一軒家の秘湯「小滝鉱泉」の女将”である。

この女将さんとの四度の出会いを時系列で追ってみる。

初めての出会いはカミさんを誘って訪れた。自分の郷里に近いお宿だったので是非ともお会いしたいと思っていた。

くねくねと曲がりくねった林道を下った先にそのお宿はあった。突然訪ねたので女将さんはびっくり！　感激の初対面となった。周囲の自然はもとより、その温かいもてなしに心を打たれた。部屋にシュウカイドウの花が活けられていた。季節の周期ごとにこの花を見ると、この日の感激が蘇える。後になって分かったことだが、この花は偶然にも自分の誕生日の花だった。（ＮＨＫのラジオ深夜便の「今日の花」による）。

この日の出会いから、女将さん（とご主人）とは親戚同様のお付き合いが今でも続いている。

二度目の投宿は、初めてのオフ会で自分の隣の席に座っていた通称「庭五郎さん」とである。この方は定年退職後に庭師の勉強をして庭師の資格を取得した男性である。年齢が近いことや家庭菜園をやっていることなど、共通点が多いことから親しくなった。

三度目は弟を招待した。二〇二一年十一月のことである。四歳下の弟は大腸がんのレベル四と診断されてしまった。その手術前に「どうしても栃木の田舎へ行きたい」というので、田舎に暮らす姉宅や、弟との子供時代の思い出の地を巡った後に訪れた。

弟の手術は成功したが人工肛門になった。災いが続く。退院後の朝の散歩中に交通事故に遭遇してしまう。一時は植物人間のような状態だったが、手足を動かせるようになった。

四度目は、黒磯市立鍋掛中学校 昭和三十三年度卒業生の同窓会の開催である。（現在は那須塩原市：鍋掛中学校は昭和五十二年に廃校）

二〇二二年の新年早々のこと、養子ちゃんから「同窓会をやってよ！」と声がかかった。春先にでも計画しようとしていたが、弟の事故でそんな心境ではなくなり日延べになっていた。入院中の弟には会うことができず、鬱々とした日々が続いた。弟の分まで動こうと、夢中になって近所の公園の花壇の世話などをしていた。「ヨシッこの際だから懸案事項は突破しよう。同窓会の決行だ！」。そんな気持ちが芽生えた。

同窓会の案内文の冒頭である。

「“ポツンと一軒家の小滝鉱泉で同窓会を開催したいな！”これは私の夢の一つでした。この度、地元有志の皆さん方のお力添えのお陰でその夢が実現しようとしています」。

二〇二二年十一月七日～八日の日程で、中学校の同窓会をこの小滝鉱泉で開催した。出席者は十三名。校歌や応援歌を唄い、童謡の「赤とんぼ」や「故郷」。「逢いたいなぁあの人に」「別れの一本杉」などをみんなで唄う。夜の耽（ふけ）るのも忘れて語り合った。お宿の料理やおもてなしには同窓生も感激の様子だった。

何人もの人が現地の下見に行ってくれた。翌日の行程を企画してくれた人もいる。

夢は実現するものだとつくづく思う。全ては人とのご縁が始まりである。

「ありがとう！」の意味は、“有り難し”からきている。有ることが難しいはずなのに、次々といい出会いが展開されるから不思議だ。まさに「有り難い！」の一語につきる。

写真

（右上）林道を下る　↓（右下）小滝鉱泉

（左上）おしらじの滝　↓（左下）八方ヶ原

郷愁

川村美子

私は約十年ほど前に茅ヶ崎郷土会に入会させていただきました。

ロンドン在住ですが、東京にも住まいがありますので、来日した際、郷土会の会報を読むのが楽しみです。私の父方の祖母は、茅ヶ崎の隣の寒川町の出身で、昔、父親に大岡越前守忠相侯ゆかりの場所に連れて行ってもらい、先人、先祖を想う気持ちが高まり、ずっと誇らしく思っていました。

入会のきっかけは、大好きな湘南海岸に来て茅ヶ崎駅に寄った際、たまたま市民文化会館に行き、大岡忠相侯に関する写真展示を見付けたことです。目を輝かせてご親切に説明して下さる会員の方々に想いが重なり、すぐに入会させていただきました。

私は、神戸、芦屋、西宮で生まれ育ち、こどものころは甲子園の浜で泳いでいました。あのベルリンオリンピックで金メダルをとった前畑秀子選手が、後年、水泳指導をなさっていて、私の小学校にも教えにいらっしゃいました。残念ながら水泳は上達しませんでしたが、山を背にし、海が目の前にある光景と環境は、私には当たり前のようになりました。

高等学校の修学旅行の鎌倉、三浦半島、房総半島をめぐるコースで、茅ヶ崎の加山雄三さんのご実家近くや、ゆかりのある所をバスガイドさんから案内されました。富士山も見ることができて、なだらかな山々があり、近くに海がある感激の連続でした。

ポルトガルのビーチ

私は、クリスチャンであった父方の祖母から、開かれた道のりを感謝して歩むことを教えられ、二〇代で東京に引っ越しし、勉学し、ロンドンに移住してから三十八年がたちました。

一九九一年から、毎年夏にはポルトガルに行きますが、リスボンからカスカイス迄の海岸線が、湘南海岸と似ていて、通る度に、サウダーデと故郷への想いにふける時があります。サウダーデとはポルトガル語で「郷愁」

という意味です。ポルトガルの人たちはビーチでのんびりするのが大好きです。

この夏、逗子から茅ヶ崎まで移動した際、外国人も多かったのでポルトガルのビーチを想い、郷愁を覚えました。不思議です。

前ページの写真をご覧ください。

英国でも暑い日は多くの人々がビーチに殺到します。山や海の自然の恵みに満たされて人は活かされているのですね。美味しい海の幸も山の幸なども、平等に、私たちの生きる糧となり、感謝しています。

私の教会の庭の写真は、イングリッシュガーデンと言えるでしょうか。庭にりんごや梨の木があり、ベリー類なども楽しめて、バラの花が咲き乱れます。リスが走り回り、キツツキなどが盛んに遊んでいます。

私は、どこに居ても、何があっても、感謝し、幸せを胸いっぱいに感じます。活かされている喜びがあふれます。

もっと茅ヶ崎のことを知りたいです。思いがけない発見もあるでしょう。

イギリスの情報誌「ＭＯＮＯＣＬＥ」（モンクル）の二〇二〇年一月号に掲載された「世界のベストモールシティ２５」で、茅ヶ崎市が、日本から唯一、第五位にランクインしました！

誌面では、山と海に囲まれ、東京からわずか一時間の所にある茅ヶ崎は、私の田舎の隠れ家のようです。やはり茅ヶ崎はインターナショナル！

茅ヶ崎郷土会が、ますます発展されますようお祈り申し上げます。

（二〇二二年一一月　記）

ロンドン　教会の庭

演劇＆映画のはじまり～小津監督 生誕一二〇年

長谷川由美

今年は、映画の巨匠 小津安二郎監督の生誕一二〇年の年です。

茅ヶ崎で小津監督といえば、茅ヶ崎館の二番のお部屋。ここを定宿に、脚本家の野田高梧と組んで名作を生み出していったことが有名ですよね。

私はファンでも、研究者でもありませんが、茅ヶ崎ゆかりの人物館の事業「ゆかりラボ」に参加して、昭和二十六年に茅ヶ崎館に籠って作品を作っていく小津＆野田の日記を読み比べるという課題に取り組みました。その中で印象深かったことを書いてみます。

このお二人、とにかくよくお寿司を食べに行きます。出前もとります。小津日記には「丸福」、野田日記には「丸橋」という店名が出てきて、どうやら「丸橋」が正解だそうですが、なぜ？小津はずっと間違い続けていたのでしょう？　面白いです。茅ヶ崎館で夕食を済ませてから寿司を食いに行く、という記載もたくさんあります。夕食後のお寿司って？と思いますが、おつまみを食べて、お酒を飲んでいるのか？　お寿司屋さんの在り方が、現代とは違う様子が伺えます。

どうしても気になったのが、このお刺身は「冷たいのか」「ぬるいのか」ということ。そこで調べてみると、小型冷蔵庫が発売されたのは翌年昭和二十七年で、サラリーマンの十ヶ月の給料相当の値段だったとのことで、お二人が食べたお刺身は、室温なりの温度のぬるいものなのでした。

他にも「すし元」という店名が登場し、これは以前、南湖にあって、その後、雄三通りに移り、今は営業していないお店だそうです。

茅ヶ崎には、なぜかこうした文化人が集まってくるのですね。

小津監督はドキュメンタリー映画を一本だけ撮っており、それは六代目尾上菊五郎主演の歌舞伎記録映画「鏡獅子」（一九三五年）です。

日本で現存する最古の映画は、九代目市川團十郎の「紅葉狩」（一八九九年・重要文化財）です。

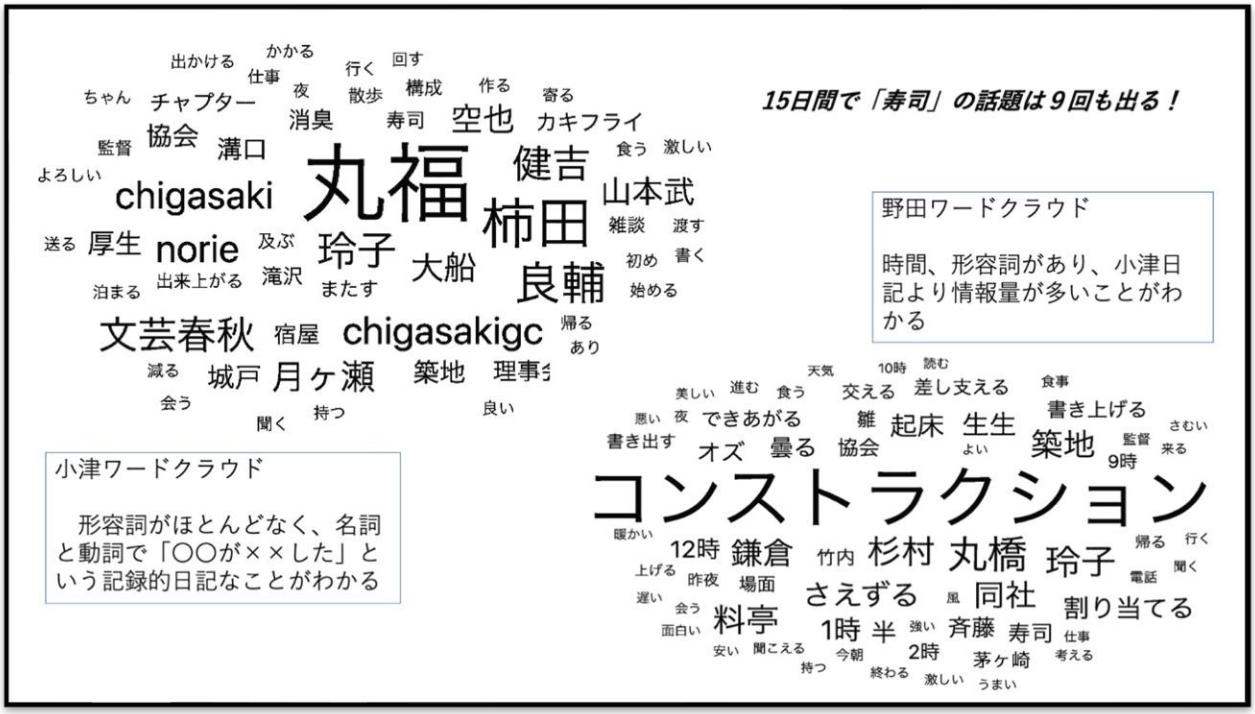
平和町のあたりにあった團十郎別荘で、六代目菊五郎は若い頃に稽古に励んでいました。團十郎を慕って、川上音二郎、貞奴が高砂緑地のあたりに移り住み、日本初の男女混合劇「正劇オセロ」（一九〇三年）が上演されました。この年に、小津監督は生まれています。音二郎は、「和洋折衷結婚式」という無声映画を撮ったそうですが、フィルムが現存しているのかはわかりません。

一八九九年に映画「紅葉狩」が撮影され、一九〇三年に初の男女混合、西洋式演劇「正劇オセロ」が上演され、日本における近代演劇と映画は、茅ヶ崎を選んだ文化人によって生み出されたことになります。なんと奇遇！というか、誇らしいと言いましょうか。

このような人たちが英気を養う茅ヶ崎。現在も茅ヶ崎館では、現役の映画監督、脚本家が執筆活動などをされており、一二〇年続く不思議な系譜です。

そのようなわけで、今年は小津監督生誕一二〇年。茅ヶ崎の文化史をおさらいしていく中でも、このメモリアルイヤーは大切なきっかけだと思います。

もう一つ、音二郎の姪、青木鶴子は、無声映画のスーパースター早川雪洲の奥さんで、ハリウッドのアイドル的日本人女優でした。こんなご縁からも、演劇と映画がごちゃまぜの創成期。演劇と映画がごちゃまぜになる「連鎖劇」(注)も、とても興味深く、今年の文化史発掘エコミュージアム活動をしていきたいと考えています。



（注）

連鎖劇とは

無声映画の中で、映像に役者が台詞をつける部分と、スクリーンが上がって演劇になる部分がある舞台。

ワードクラウドとは

小津、野田日記のうち、二週間の記述からできたワードクラウド。

多く出てくる単語が大きく、太くあらわされる集計図。小津日記は、形容詞がほとんどなく、どちらも食事に関わる言葉が多いのがおもしろいと思います。

茅ヶ崎郷土会からのページ

元気だった西さん　2016.11.2（右から誉田さん、西さん、源さん、編集子）

西 輝幸さんをお見送りする

西 輝幸さんのご逝去を悼みます

山本俊雄

郷土会の会報「郷土ちがさき」第一五五号（令和四年九月一日号）が出来上がり、八月の末頃に西さんの御自宅にお届けしたところ、娘さんが出てこられ、母から話があるので中に入るように、と促されました。そこで初めて西さんが十日余り前の八月中旬に亡くなられたことを聞かされました。西 輝幸さんは令和四年（二〇二二）八月十一日、享年八六歳で逝去されたとのことでした。

西さんは、私が郷土会に入る前、史跡めぐりに参加していたころ、理事として源さんと史跡めぐりを担当されていて、私は参加申し込みをいつも源さんにしていたのですが、源さんに連絡がつかない時は、西さんに申し込みますと、めぐりの当日には、西さんが「ああ、電話をくれた山本さんですか」などと迎えてくれたことを思い出します。

西さんのやさしさでさらに驚いたのは、四、五年前の渡し場めぐりで、戸田の渡しに行った時、橋の手前で昼食をした店で、アルバイトの若い子が、二人分を持ったお膳の重さからか、お膳を、今井さんと西さんの後ろから落としてしまいました。今井さんは背中一面、西さんは背中の一部と脇から前側にかけて、味噌汁とご飯などをひっかけられたことがあったのです。その時西さんと

今井さんは少しも騒がず泰然自若、かえってその子の心配をしていたことを思い出します。

温厚で優しい反面、驚いたのは、郷土会の打合せの後、サポセンからの帰り道を誉田さんとお二人で自転車をすごい勢いでこいでいたのを時々見かけ、追いつこうとしても追いつけなかったことが何回かありました。誉田さんにその話をしますと、「あれは西さんが早いので私もついていくのがやっとで必死なのだ。今でもスポーツジムに通って身体を鍛えているようです。」とのお話でした。私より約十歳上なので八十歳過ぎての話です。

お元気な姿ばかりを見ていましたので、こんなに早くお亡くなりになるとは思いもしませんでした。ご冥福をお祈りいたします。

笑顔の西さん

尾高忠昭

西さんの笑顔に最初に出会ったのは確か平成二十四年の文化祭に郷土会が文化会館内に式内社を巡った報告を展示していた会場です。

素晴らしい活動に触れ、思わず受付の西さんにあれこれ質問したりしてしまいましたが、どこの老人か不明な小生ににこやかな笑顔をもって応えて頂き、笑顔に引き込まれて入会の運びになってしまいました。

その会話の中で文化人クラブの入会も勧められたので、一転、郷土会には入会するが文化人クラブの名称に難癖をつけ、文化人になりたい人の会にすべきだなど暴論を吐いて困らせたつもりが、あの笑顔で一々頷いて耳を傾けて頂き、今となってはまことに恥ずかしい所業と反省しています。多分あの笑顔で聞き捨てておいでになったのだろうと一人心地しております。

その後平塚、小田原方面への旧蹟めぐりの折には、辻堂から乗車し、茅ヶ崎駅で途中下車して、駅改札内で笑顔とともに私たちに合図される西さんに何度もご一緒させていただきました。

西さんの笑顔は西さんそのもの、笑みの人柄そのものと思えます。いつか笑顔の西さんに近づきたいものとこの拙文を書きながらうらやましくも思っています。

（令和四年師走　記）

西　輝幸さんを偲んで

源　邦章

先日、平野会長から電話を頂きました。何事かと思ったら「西さんが亡くなられた」との事でした。突然の報せで声も出ませんでした。あんなにお元気だったのに、との気持ちで一杯でした。

思い起こせば、西さんとのお付き合いは私が郷土会に入会した二〇一一年から始まりました。入会動機は図書館に備えられていた会報「郷土ちがさき」を見て、史跡・文化財めぐりが毎年五・六回ある、と書いてありましたので是非参加したいと思い入会しました。翌年は「大山街道を歩く」ということで、西さんが中心になって六回に分けて数ある大山街道の内、「田村道」四回、「糟屋道」二回を歩きました。そこでの西さんの企画立案・レジメの作り方・案内場所の説明等、後年私が文化財めぐりを主催する時のノウハウを全て教えて頂きました。その上、文化財めぐりの報

告記をこの「郷土ちがさき」に載せるスタイルまでマネさせて頂きました。

その後、私が「茅ヶ崎の石仏めぐり」に始まり「茅ヶ崎市内の別荘地めぐり」まで六年に亘って開催出来たのも、西さんにご指導頂いたお蔭であり、且つ、毎回「文化財めぐり」にご参加頂いてアドバイスを頂いたり、時には交通整理役までかっていただいたりしました。本当に頭が下がる思いでした。

西さんが八十歳を超えた時、「そろそろ引退をするよ」と言われました。その時はまだまだお元気でしたのでビックリしましたが残念ながら本当の事で、間もなく郷土会の理事を辞められました。私もそれから千葉県の柏市に移住し、その直後からコロナ騒動が発生したので茅ヶ崎へも行けませんでした。

まだまだご恩返しも出来ないのに本当に残念でたまりません。長い間お世話になりました。安らかにお眠り下さい。

第三〇二回　史跡・文化財めぐり報告

「鎌倉市に玉縄城址とその周辺を訪ねる」

山本俊雄

令和四年十月八日（土）　参加者一七名

令和四年度二回目で市外編です。少し落ち着いてきたかに見えますが、相変わらずのコロナ禍です。下見は暑い盛りの八月三十一日、平野会長、熊沢さん、尾髙さん、私の四人で行きました。

久しぶりの大船・玉縄城址で、とても歩けないと思い、バスで龍宝寺、諏訪神社に向かおうとバス停の位置と時間を調べます。

駅北側のバスセンターに向かう連絡通路を渡っていますとバスの時刻表を見つけ、メモをしていますと平野さんがそれをカメラで写してくれます、バスセンターに向かうと、すでに熊沢さん、尾髙さんは先に進み、運転手さんに聞いたのかバス停で待っていました。

少し待って出発し諏訪神社、龍宝寺を見学します。玉縄歴史館で資料を集め、旧石井家住宅も確認します。本堂横に移ったという「ぶっけり仏」を探したのですが、お墓の方を探したためか分

かりませんでした。

龍宝寺を出て七曲坂に向かいますが、五、六年ぶりなので道を思い出せません。先に広い道が見えたので引き返そうと迷っていますと、折よく郵便配達の人に出合わせ、尋ねますとやはり来過ぎで、皆に申し訳なく思いながら暑い中を引き返し、七曲坂を登り始めます。

暑さに大汗をかき、休みながら登り切り、陣屋坂上のＴ字路まで来ますと、循環バスのバス停が見えます。この坂を登らなくてもバスで来られるのならその方がよい、との意見が急遽強くなりました。ふわん坂を下り、雨なら大変だ、と言いながら久成寺まで確認し無事に下見は終えました。

九月の事前勉強会で、皆さんに、七曲坂を上るのは大変だったのでバスで行くことも考えていると話しましたが、玉縄城址は本丸跡や諏訪壇などの主要部分が清泉女学院の敷地内なので内側に入れないだけでなく、周りは住宅地になった今、七曲坂を登らなければ城址を巡ったことにならない、との意見があり、結局下見通りに龍宝寺から行くことにしました。ただ下見では最後に行った玉縄首塚碑をバスに乗る前、最初に行くことにしました。

本番の十月八日（土）は雨予報で心配していたのですが、前々日から晴れ、大いに安堵しました。当日は勉強会の時よりも多い一七名が参加してくれて、勇んで出発しました。大船駅まで予定通りです。バス乗車の前に連絡通路の少し広い所で平野会長が挨拶し、これからの予定を話し、「バスの出発時間まえに、最初の玉縄首塚碑まで歩くので少し急ぎます」と言って出発しました。

①玉縄首塚碑　石碑を見学し、庚申塔などの説明を平野さんがしました。石碑には、「大永六年（一五二六）十二月の、安房（千葉県）

の里見氏（義弘）が鎌倉を荒らしたうえ、玉縄城を攻略しようと柏尾川まで進攻した時、玉縄城 初代城主北条（後北条氏）氏時が大船の甘粕氏、渡内の福原氏の協力を得て撃退した。その時の死者を葬り築いた塚」とあります。

里見義弘の鎌倉攻めでは、弘治元年（一五五六）に鎌倉尼五山第一位だった太平寺（郷土会は二〇一七年十二月二十五日に鎌倉の廃寺探訪で訪ねています）も攻撃を受け、住職の青岳尼（小弓公方足利義明の娘）と本尊の木造聖観音菩薩立像（現在国重要文化財）が奪われています。これに怒った小田原北条氏三代氏康が太平寺を廃寺にしたと伝わっています。青岳尼は後に還俗し里見義弘の正室となっています。青岳尼の妹が東慶寺にいた旭山尼で、その関係からも奪われた木造聖観音菩薩立像は東慶寺に返されています。太平寺から移されたのが現在の円覚寺舎利殿で、鎌倉唯一の国宝の建築物となっています。

この後急いでバスセンターに戻りましたが、バスの発車時間を間違え、十分以上の余裕ができたのを幸いに、清泉女学院発行の冊子『玉縄城跡』を参加者に披露し、次に向かいます。

②諏訪神社　下見では大通りからの入り口が分かりづらかったのですが、すぐに着きました。

玉縄城三代城主 北条綱成（つなしげ）が信濃の諏訪大社を勧請し、城の守り神として玉縄城東側の最高部（海抜約八〇㍍）の土塁上に祭りました（現在の清泉女学院内の諏訪壇）。祭神は建御名方神。元和五年（一六一九）に玉縄城が廃城となり、村人が現在地に移す時、近くの御霊社も同時に合祀しました。

③陽谷山龍宝寺　諏訪神社のすぐ南側にあり、大船フラワーセンター方向からは、植木に向かうトンネルを過ぎるとすぐ右側にあります。本尊は釈迦如来像、開基は北条綱成、開山は泰絮宗栄（たいじょそうえい）と伝えられ、文亀三年（一五〇三）北条綱成が城の東北に、香花院として開いたのが始まりです。綱成の戒名が「瑞光院殿実州宗心大居士」だったため、寺は「瑞光院」とも呼ばれました。六代城主氏勝（綱成の孫）の時、大応寺として現在地に移転し、その後江戸時代の住職によりいまの寺号になりました。

玉縄歴史館に展示されている玉縄城の地模型

この場所は鎌倉時代に二代将軍源頼家の子、公暁の七人の部下が源実朝の首を隠した場所とも言われています。また本堂向かって左脇には**「ぶっけり仏」**と名付けられた三代北条綱成・四代氏繁・六代氏勝の供養塔があります。村の小道の脇に立っていた塔がいつも倒れていて、誰かが気付いて直しておくとまた倒れているので、このような名がつけられたとの話です。このぶっけり仏については町田会員が「十年ぐらい前には本堂左脇から一〇分ぐらい登った山の中にあった」と地図まで用意してくれていたのですが、移設されていた

龍宝寺のぶっけり仏

ので、門前で「一〇分も登られないから安心してください」と話しましたが、本当に登らなくて済みました。

境内にある**玉縄歴史館**の城跡ジオラマなどを再確認した後、国重要文化財で築三百年と言われる**旧石井家住宅**や江戸時代の一時期にこの地を治めていた**新井白石の碑**を見学し、いよいよ七曲坂に向かいます。

④七曲坂と⑤玉縄城址（大手口址）

七曲坂の登り口には「鎌倉・玉縄城を偲ぶコースマップ」の看板があり、陣屋坂上からふわん坂まで描かれています。

玉縄城は永正九年（一五一二）伊勢宗瑞（北条早雲）によって築かれた（赤星直忠一九五九年）と言われていますが、『関東の名城を歩く 南関東編』には「最初の城は山内上杉氏により一五世紀中葉頃で、永正九年より半世紀ほどさかのぼる」と書かれています。いずれにしても早雲は三浦の新井城に籠る三浦道寸と江戸城まで下がっていた扇谷上杉朝興を分断し、抑えの城とするため永正九年に大改修を行い、永正十三年（一五一六）には救援の扇谷上杉氏を破り、新井城の三浦道寸父子を落城自刃に追い込んでいます。

四、五年前に七曲坂を登った時には坂の途中、登り口近くに冠木門があったのですが今はなく、ただ整備された階段状の道が続くばかりです。登り切った所にある大手口跡にも住宅が広がり、城址に登った実感がわかないのが残念です。

七曲坂を、玉縄城址へ向かう

少し歩くと陣屋坂上の三差路にでます。その左角の急な階段を登った所に**⑥玉縄城址碑**と**陣屋坂上庚申塔**があります。

三差路を直進し二本目を左折すると**⑦ふわん坂**に出ます。この坂道は「玉縄歴史の会」の案内パンフレットに「城宿の集落から久成寺の門前近くに出る急坂で、坂の中程の両側に平場があり、侵入を防御する設備があったと思われます。地名の由来についての伝承は伝えられていません。」とあります。坂道の急な所には舗装を馬蹄のように彫り込んで滑り止めにしていましたが、雨の時などに歩くのが心配な所でした。

ふわん坂から右折して久成寺に向かう角に**⑧鎌倉道の道標**があります。中央に「帝釈天王」と刻まれた塔は万延元年（一八六〇）の造立、塔の右側にかまくら道、左にふじさわ道とあります。もう一つの角柱は、左従是鎌倉道・ふじさわ道と刻んでいます。平野さんはここが鎌倉道で藤沢に通じていたのだ、と石塔の話しをしていたのですが、皆さんはそこそこにすぐ先の久成寺に向かいました。

ふわん坂を下りた所にある鎌倉道の道標

⑨光円山久成寺（くじょうじ）

「永正十七年（一五二〇）足利一一代将軍義澄に仕えた梅田尾張守秀長が自宅を寄進して創建した。徳川家康が小田原攻めの際に立ち寄って祈願を頼み、恩賞として三石の所領を与えた。家康は鷹狩りの折に葵の紋のある弁当箱を授けた。」などと伝えられています。寺には「鎌倉郡玉縄郷ノ内三石のこと」と書かれた徳川五代将軍綱吉の朱印状が残されているそうです。

境内には、鎌倉三代将軍実朝を暗殺した公暁を討ったとされる長尾定景と一族の墓があります。長尾定景は長尾景虎（上杉謙信）の祖先にあたり、大庭一族と同じ鎌倉党で、頼朝挙兵時の石橋山合戦では一族の大庭景親に従い、頼朝軍の岡崎義実の子佐奈田与一義忠を討ち取っています。後に頼朝が鎌倉入りをすると、長尾定景は降伏し、義忠の父 岡崎義実に引き渡されますが、義実は、毎日法華経を唱えている定景を見て、息子を殺された恨みを封じ、頼朝に助命を願い出ます。しかしその後、宝治合戦で三浦氏と共に滅んでいます。

以上でこの日の史跡めぐりを終了しました。大船駅に戻り解散し、有志で加藤さんお薦めの駅南口大衆食事処で反省会を兼ね楽しい食事をとりました。参加して頂いた皆さんありがとうございました。

龍宝寺山門前で記念撮影

【これからの事業予定】

三月までに取り組む事業は次のとおりです。コロナウイルス感染がまだ続いてはいますが、「中島郷土誌」編集を除き、会員外の参加も歓迎して次のように予定しています。

○郷土会勉強会「胞衣（えな）塚の話」

令和５年１月２４日（第４火）午後１時３０分～

場所　市立図書館第一会議室

お話　丸ごとふるさと発見博物館の会々長　加藤幹雄さん

○茅ヶ崎郷土会　史跡・文化財めぐり

丸山城址とその近くを訪ねる（伊勢原市）

事前の勉強会　２月２１日（第３火）午後１時３０分～

市立図書館第一会議室にて

実施日　３月１１日（第２土）丸山城址を訪ねる

８時５０分までに茅ヶ崎駅改札前に集合

○二十三ヶ村調査会　「中島郷土誌」の編集

茅ヶ崎には２３の近世村があります。その全部の郷土誌を作ろうという大風呂敷を広げ、平成２９年（２０１７）に中島村から始めた事業ですが、５年たってもまだ完成しません。ここに来てやっと原稿の見直しと編集作業にこぎ着きました。原則、第１・３火曜日午後、市立図書館にて実施。

「郷土ちがさき」次号一五七号の発行は令和５年５月１日の予定です。調べてみたこと、質問したいこと、エッセイ、日常雑感、短歌、俳句などなどの原稿、待っております。

【これまでの事業報告】

○茅ヶ崎 みんなのアートフェス２０２２　写真展

茅ヶ崎市民文化祭は、茅ヶ崎市から茅ヶ崎市文化団体協議会が受託して行ってきましたが、今年度から形が変わり、主催は公益財団法人 茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団、共催が茅ヶ崎市で、一般市民などが参加する「茅ヶ崎 みんなのアートフェス２０２２」となりました。茅ヶ崎郷土会は前記文化団体協議会の一員として参加し、１０月３１日から翌月３日まで、市民文化会館の展示室Ａで写真展を行いました。

内容は①市内の大山道と玉縄城址探訪、②相模川河口付近の野鳥、③柳島海岸の風景の３部門で、１８０点ほどを展示しました。コロナ禍の中、私たちはマスクを着用し、たくさんの方々に見ていただきました。

○第５０回茅ヶ崎市郷土芸能大会

茅ヶ崎市の郷土芸能大会の一回目は昭和４７年（１９７２）１１月２９日でした。昭和天皇ご崩御の年と、コロナ禍のために令和２・３年は中止して、今回、５０回目を迎えました。

市教育委員会から郷土芸能保存協会へ委託して行われていますが、茅ヶ崎郷土会は１回目から開催に協力しています。

５０回を記念して、本番の１１月２７日（日）には文化会館小ホールのホワイエ、前日には市役所１階のふれあいプラザ、開催後には市立博物館で、各保存会が使う小道具の展示も行われました。

演目は出演順に次のとおりでした。茅ヶ崎の民話「弁慶塚ものがたり」、柳島お座敷甚句、圓藏馬鹿おどり、芹沢焼米搗唄、上

赤羽根甚句、南湖麦打唄、上赤羽根祭囃子、芹沢ササラ盆唄、圓藏祭囃子、柳島大漁船上げ唄、柳島エンコロ節。毎年参加していた県立茅ヶ崎高等学校の文楽と茅ヶ崎レクリエーション協会が不参加だったのが残念でしたが、どの団体もすばらしい演技でした。

新しい年を迎え、会員の皆様方の無事健康と

一層のご発展をお祈りいたします。

茅ヶ崎郷土会役員一同

会長　平野文明
副会長　杉山 全
事務局長　熊澤克躬
会計　尾髙忠昭
理事　山本俊雄
理事　森 早苗
監事　羽切信夫
相談役　青木昭三

【一五五号　正誤表】

八頁下段　７行目　北**海**道の　→　北海道（**きたかいどう**）の
一五頁下段　後ろから５行目　『茅ヶ崎歴史…』　→　**山口金次著**『茅ヶ崎歴史…』
一六頁下段　５行目　「遠藤村」する　→　「遠藤村」**と**する
一八頁上段　６行目　戸田　→　**遠山**
一九頁上段　６行目　（現在の日大病院のあたり）→　削除
一九頁下段　10行目　持ち馬葬　→　持ち馬**を**葬
二一頁上段　後ろから５行目　郷土**誌**研究グループ　→　郷土**史**研究グループ
二一頁下段　３行目　②同（**四**）　→　②同（**二**）
三一頁上段　後ろから２行目　地方**時治**　→　地方**自治**
三二頁下段　後ろから９行目　水越良介の**子**　→水越良介の**孫**
三四頁下段　２行目　移り**しし**年代　→　移り**し**年代

【編集後記】

故小山敬三画伯は文化勲章受章者で当市の名誉市民にも選ばれています。画伯の作品を市内在住の方が所有されていることが名取会員の調査で分かり、本誌に紹介することができました。当会のＨＰに掲載の本誌ではカラー画像を見ることができます。

久々に神奈川県を舞台とする大河ドラマが放送され、残すところ数回で終了します。同県人として興味を持った方も多かろうと感想を求めました。応じてくださった皆さんの文章を掲載してあります。

原稿を寄せていただいた方々にお礼を申し上げます。そしてまた、来号にも投稿をお願いします。ご意見ご感想を編集担当の平野（０９０―８１７３―８８４５）まで頂けるとありがたいです。

当会のＨＰのＵＲＬを https://chigasaki-kyodokai.com/ に変えました。

「茅ヶ崎郷土会」で検索してもヒットします。

二次元コード（ＱＲコード）は下のとおりです。

この１５６号カラー版も掲載しています。